

伝え

発行 日本口承文芸学会

〒150 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大学文学部 伝承文学研究室内
☎03-5466-0224

外に向けての機能

日本口承文芸学会会長 里子 木村 純

ネール大学のワルマー博士から要請状が届いた。助教授のアニタ・カハンナ女史が学位請求論文を提出する。ついては副査を務めて欲しいとする内容である。

こうした際にインドの大学は、主査は主任の指導教授。そして副査二名は他の大学に帰属する研究者、というのを原則にする。審査には口頭試問が伴う。しかもそれは学内のみならず、一般の新聞にも公示される。その上で文字通り、オープンで行われる。ただし、傍聴人には発言の機会は与えられない。それでも先年のマンジュシェリー・チョウハン女史のときには、副査の私は冷汗三斗の思いをした。続いて、今回のアニタ・カハンナ女史のテーマは「日本における釈迦説話受容の研究」である。一昨年、ニューデリーに滞在中、『室町時代物語大成』第七卷所収「釈迦の本地」の特訓をした。40度近い暑熱の中で、連日テキストの講読に勤しんだ。それを想うと無下に断るわけにも行かない。

さて、こうした情況や事態の中で、日本口承文芸学会に向けてあえて提案、提言がある。昨今来日中の、あるいはかつて滞在した外国人研究者の数は少ない。大学院に籍を置いて勉学中の若い人もすこぶる多い。学問の門戸はすでに解放されているかのように見える。しかし、次に日本国内での学位申請となると、周知の如く、これはほとんど不可能である。止むを得ず、自国に帰った上での処置となる。かくして、当然如上のような成り行きになる。

そこで思うのだが、どうであろう。学会は更に手を広げ、かつ機能を拡充してこうした外国人の“日本研究”もしくは“日本との比較研究”に直接対応する方法はないものだろうか。それでなくても研究集団である学会自体が、海外の学会や大学との提携や連立に手を拱いているのはいかにも残念である。

外に向けて、私共の学会ははたして何が出来るか、いま一度問い直す時機に来ていると、私は思う。

1995年度 日本口承文芸学会 研究例会のご案内

日時 : 1995年10月28日(土) 午後2時~5時
場所 : 中央大学駿河台記念館
発表 : 法橋 量「ドイツ民俗学における世間話研究の現状」
三原幸久「ラテンアメリカ先住民における
昔話のクレオール化-異民族間の口承説話伝播の形態-」

1995年度

日本口承文芸学会大会報告

狩俣 恵一

1995（平成7）年度の第19回大会は、6月3日（土）～6月4日（日）の二日間、北海道札幌市北海学園大学に於いて、北海学園大学文学部交流会館で開催された。初日の公開講演会では、藤井貞和氏の講演「口承文学の歴史と現状」が、昨年の大会で好評を博した。藤井氏は、口承文学の歴史を、古くは縄文時代の土器に刻まれた文字から、中世の写本文化、近世の印刷文化へと追いついていく。そして、現代のデジタル文化における口承文学の新たな可能性について、興味深い見解を示した。

また、藤井氏の講演には、口承文学の歴史を、古くは縄文時代の土器に刻まれた文字から、中世の写本文化、近世の印刷文化へと追いついていく。そして、現代のデジタル文化における口承文学の新たな可能性について、興味深い見解を示した。

（研究発表）

王秀文氏（遼寧師範大学）「シャクシにまつわる民間信仰」

剣持弘子氏（昔話研究 土曜会）「三枚のお札」の成立

大谷洋一氏（道立アイヌ民族文化研究センター）「アイヌの口承文芸」

三浦佑之氏（千葉大学）「ワオとマオーアイヌと東北」

（シンポジウム）

『語り物からみた日本・アイヌ・シベリア』

シンポジウムのパネリストは、兵藤裕巳氏（埼玉大学）・萩原真子氏（千葉大学）・奥田統己氏（札幌学院大学）の各氏で、司会は大谷洋一氏（道立アイヌ民族文化研究センター）であった。

今年大会の会員参加者は、70余名であったが、会員以外の方も、充実した大会であった。高橋宣勝先生、ご苦労様。

1995年度

日本口承文芸学会大会

公開講演報告

川島 秀一

北海道で開催されるのが初めという、第19回大会は、東の京大の藤井貞和氏と、会場は北海学園大学の文学部交流会館で開催された。藤井氏の講演「口承文学の歴史と現状」は、丸山頭主の『東野の民話』(1992)を軸とし、口承文学の歴史を、古くは縄文時代の土器に刻まれた文字から、中世の写本文化、近世の印刷文化へと追いついていく。そして、現代のデジタル文化における口承文学の新たな可能性について、興味深い見解を示した。

本日は、アイヌの歴史を、古くは縄文時代の土器に刻まれた文字から、中世の写本文化、近世の印刷文化へと追いついていく。そして、現代のデジタル文化における口承文学の新たな可能性について、興味深い見解を示した。

金角銀角の物語を、古くは縄文時代の土器に刻まれた文字から、中世の写本文化、近世の印刷文化へと追いついていく。そして、現代のデジタル文化における口承文学の新たな可能性について、興味深い見解を示した。

両氏の講演は、口承文学の歴史を、古くは縄文時代の土器に刻まれた文字から、中世の写本文化、近世の印刷文化へと追いついていく。そして、現代のデジタル文化における口承文学の新たな可能性について、興味深い見解を示した。



受—贈—書—リ—ス—ト

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 笠原政雄昔話集 C D 1 3 枚 | 沖繩国際大学文学部紀要(国文学篇) |
| 日立市科学文化情報財団 '92 | 23巻1号(通算35号) '95.1 |
| 鈴木サツ昔話集 C D 1 1 枚 | 真澄遊覧記研究通信 7号 |
| 日立市科学文化情報財団 '93 | 真澄遊覧記研究会 '95.2 |
| みちのく昔話集 第1集 C D 1 3 枚 | 日本の世間話 野村純一 |
| 日立市科学文化情報財団 '94 | 東京書籍 '95.2 |
| 日本民話の会通信 No.117~120 | 同志社国文 41号 |
| 日本民話の会 '94.1~'95.7 | 同志社大学国文学会 '95.3 |
| 国立歴史民俗博物館研究報告 56~62集 | 国文学研究資料館報 44号 |
| 国立歴史民俗博物館 '94.3~'95.1 | 国文学研究資料館 '95.3 |
| 国際日本文学研究集會會議録 第17回 | 甲南国文 42号 |
| 国文学研究資料館 '94.10 | 甲南女子大学国文学会 '95.3 |
| 野州国文学 54・55号 | 民俗博物館だより 67号 |
| 國學院大学栃木短期大学国文学会 | 奈良県立民俗博物館 '95.3 |
| '94.10/'95.3 | 民俗博物館紀要 14号 |
| 日本民俗学 200~202号 | 奈良県立民俗博物館 '95.3 |
| 日本民俗学会 '94.11~'95.5 | 研究集録おおつま 8号 抜刷 久保孝夫 |
| 民具マンスリー 27巻8~12号 28巻1~3号 | 函館大妻高等学校 '95.3) |
| 神奈川大学日本常民文化研究所 | 要覧1995 |
| '94.11~'95.6 | 神奈川大学日本常民文化研究所 '95.4 |
| 研究年報2 1993年度 | 神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 |
| 国立歴史民俗博物館 '94.12 | 18集 '95.6 |
| 日本学術會議月報 36巻1~7号 | 世界の愚か村話 日本民話の会・外国民 |
| 日本学術會議広報委員会 '95.1~7 | 話研究会 三弥井書店 '95.6 |

事務局報告

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。
 入会金 1000円 年会費 4000円
 入会申し込み書請求先：☎150 東京都渋谷区東4-10-28
 國學院大学文学部 伝承文学研究室(野村教授)内
 日本口承文芸学会事務局
 ☎03-5466-0224
 送金先：[郵便振替] 00180-4-44834
 The Society for Folk-Narrative Research of Japan
 c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,
 4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆本号からは、大島広志・中川裕・中村とも子が編集担当します。